

共通教育科目「哲学基礎B」の2012年度2学期木曜1時限 入江幸男
「現代形而上学概説」
第2回(20121011)

§2 形而上学(存在論)と認識論と言語意味論の分離不可能性

1 主張文の意味と知覚内容の分離不可能性

例1:「青」という言葉の意味を理解することと、それが指示する色の知覚を同定することは分けられない。「青」の語の意味は、それが指示する色の知覚であるといえる。

「青」という語の出指示する色ないし色の知覚、が語とは独立に在って、それに語「青」という名前をつけたのではない。「青」「緑」「黄」「赤」「紫」などの色の語の体系と同時に、色の知覚の体系が出来あがる。

したがって、xさんが「これは青い」といい、yさんが「これは青くない」というとき、彼らの理解する語「青い」の意味が異なっているのか、それとも「これ」で指示する対象の色の知覚の仕方が異なっているのか、区別がつかない。

例2:「残酷な行為」という言葉の意味を理解することと、それが指示する行為を他の行為から区別することは、できない。

この場合も、xさんが「それは残酷だ」といい、yさんが「それは残酷ではない」というときに、「残酷」の意味理解が違っているのか、行為の理解の仕方が異なっているのか、区別がつかない。

学生のコメント

- ・価値観を表す形容詞など、「美」「格好よさ」「善悪」
- ・「哲学は屁理屈だ」「哲学は屁理屈ではない」
- ・「平和」:「今の日本は平和だ」「今の日本は平和ではない」
- ・「あそこは近い」「あそこは近くない」
- ・「Aくんは、安部寛に似ている」「Aくんは、安部寛に似ていない」
- ・「これは驥です」「それは驥ではない」
- ・「それは生存権だ」「それは生存権ではない」
- ・「哲学は難しい学問だ」「哲学は難しい学問ではない」
- ・「手」や「足」の意味は明確ではないでしょうか。
- ・「彼は友達が少ない」「彼は友が多い」
- ・「暗くなったらから帰って来い」「まだ暗くない」

2 存在論、認識論、言語意味論の分離不可能性

- ・私たちは、事実がどのようになっているか、については、言葉によってしか捉えられない。
したがって、世界の中に何が存在するかは、世界について私たちがどのように語るかに依存している。
私たちがどのような存在論を採用するかは、私たちがどのような言語を採用するかに依存している。
- ・クワインは、この意味での、「存在論の相対性」を主張した。「物理的対象と数学的対象の存在論は神話である。しかし、神話という資格は相対的なものである。現在の場合、それは、認識論的観点と相対的である」(クワイン『論理的観点から』飯田隆訳、勁草書房、p. 28)
- ・形而上学の問題が、言語の問題、認識の問題と密接に結びついていることは、これからの講義であきらになるだろう。

§3 永井均の〈私〉のメタフィジックス

現代形而上学で「私」が問題になるときには、多くの場合「自我の同一性」をどのようなものとして説明するのか、が議論される。現代の日本では、より深い「私」についての議論が行われている。日本の哲学研究の中で、最も議論されている形而上学の問題は、「私」の存在論であるので、今年度は、これから論じたい。

まず、永井均『〈私〉のメタフィジックス』(勁草書房、1986)の第一章「他我問題」の議論を紹介する。永井は、「他我問題」という出来合いの「哲学的問題」を手がかりとして、彼が考える本当の問題への通路を示す。

・他我問題とは、つぎのような形で設定される。

「私は通常、外的表出の背後にある人々の心理状態を問題なく理解しており、ときとして「振りをしていない」のではないかと疑うことはあっても、すべての場合にそうするわけではない。いわんや、彼らに心があるかどうかを疑わしく思うことなどはまったくない。それは何故だろうか。そこにはどのような機制がはたらいているのだろうか。」(4)

・この問題を論じる時の第一の論点

「第一の論点とは、そのようなしかたで「他人」の心を問題化する「私」とはいったい誰のことなのか、という疑問である。」

「他我問題」を問題と感じるひとは、ほぼ例外なく、その「私」を自分自身と同一視している。これは当然のことであろう。そうでなければ、そもそもそこに問題を感じることはできないはずだからである」(5)

だが、「解答はすべて、ある人が別の人の心理状態を理解し認識しうるのはいかにしてか、に答えているに過ぎない」(5)

「前ページの問題設定のなかに登場する「私」をすべて「ある人」に置き換えて、全体を読み返していただきたい。「問題」そのものの形式的な意味は変化していないにもかかわらず、そのように変形された「他我問題」に問題性を感じるひとは少ないであろう。」(5)

「他我問題」の「私」が任意に選ばれたどの人間であってもよいのであれば、どの人間もその意味での「私」でありうる、つまり他の我でありうるものが、問題設定とともに承認されていることになるからである。」(6)

他我問題とは、他人に心があることをどのようにして認識できるのか、と言う問題である。永井は、このように問う「私」は誰のことかを問うた。それは、一般化可能な「ある人」ではない。このように問う「私」は他者を想定していない私である。つまり、他者と同様の存在ではない私である。後にかれは、〈私〉と表記する。

・第二の論点

「第二の論点は、ひとくちに「他我問題」と言っても、他我の認識の問題と他我の存在の問題とはまったく別の問題なのではないかというものである。」

通常解釈によれば、「他我認識の可能性が保障されることによって、独我論は論駁されることになる」

しかし、「かりにわれわれが何らかの仕方他人の心のなかに起こる全てのことを即座にかつ確実に知りうるとしても、その知り方が自分自身の心のなかに関する知り方と異なってさえいけば、独我論は生じうるのではあるまいか。すなわち、独我論は、自己であることと、他者であることの存在論的な差異のみから生じうるのではあるまいか。そして、他我の存在の問題とはまさしくこの差異の問題、つまり、この私ではない別の「私」の存在の問題なのである。」(6)

私が他我の心を知るとしても、自分自身を知るような仕方では知りえない。つまり、「他我の心は知りえない」のであり、これは文法の問題なのである。

「ある人が別の人の心理的状态を体験することができないというのは経験的事実の問題なのではない。それは、論理的・概念的な問題、ウイゲンシュタイン風に言えば文法問題なのであって、ある人がどのような体験をしても(どのような心理状態になっても)、われわれはその人が別の人の心理状態を体験したとは認めないのである。」⁷

「したがって、直接体験こそが最も確実な認識の源泉であるとすれば、他人(他我)とは自分には確実に知ることができる永遠に不可能な存在者のことなのである。他人(他我)の存在を認めるということは、そのような存在者の存在を認めるということ、つまり直接体験できないがゆえに確実に知ることができない体験の所有者の存在を認めることにほかならないのである。」

「他人を心あるものとして認める(他我の存在を認める)ということは、そこから世界が開けてくるもうひとつの原点の存在を承認することであり、自己の方から出発しては究極のところ捉えることのできない一点の存在(それが捉えられないということ)を承認することなのである。」(8)

・〈私〉の独我論と「私」の独我論

「他人(と思われているもの)は究極のところは心のない自動機械かもしれない、という疑いはどこまでも可能ではないか、と問われるかもしれない、私は可能だとおもう。現実の生活のなかで、人々は

その可能性に目をつぶっているに過ぎない。論理の上では否定できないその可能性に目をつぶることこそが、他我の存在を承認することであり、現実を現実として成り立たせることなのである」(9)

もしこれを独我論と呼ぶのであれば、「独我論は真理、しかもほぼ必然的と言ってよい真理だと思う。それはむしろ「他人(他我)」という概念の意味から出てくる文法的真理であるときえ言えよう。」

「しかし、私はそれを独我論とよびたくはない。」

なぜならそれが「本来の独我論の真理性を隠す、と思うからである。そこで隠される独我論を〈私〉の独我論と名づけ、隠す方の独我論に、「私」の独我論という仮称をあたえておこう。」

「私」の独我論の真理性は、〈私〉の独我論の真理性を隠す——「他我問題」を出発点として私が本当に問題としたいのは、むしろこの構造なのである。」(9)